

# テクノサークル「けんちくをつくる会」2019 年度活動報告

吉岡 寛之\* 林 淳平\*\*

## Reports of Annual works of the Techno Circle “Tuku-Ken”

Hiroyuki YOSHIOKA\* Junpei HAYASHI\*\*

### 1. 活動の背景と目的

一般的に建築デザイン教育は、講堂内の座学による設計演習で行われている。そこでは、社会的背景、敷地条件、様々な人の活動などをイメージしながら建築のデザインを考える。そのため、実際の空間体験に関係した、利用者の活動に触れる機会は少ない。建築サークル「けんちくをつくる会」（通称つくけん）では、座学で得られない建築体験を重視した活動に取り組み、今期で9期目を迎えた。今年度は3年生、1年生が中心となり活動を継続してきた。一つの建築をつくるプロセスから、共同で建築をつくる経験から、参加学生の企画力、行動力、調整力を向上することを目的としてきた。

### 2. これまでのつくけんの活動

学生が主体となり、毎年春に活動の目的や内容を話し合い、1年間の取り組みについて検討する。どのような建築空間をどのような場所で、どのようにするか、必要な予算手配や敷地交渉など、建築をつくる全てのプロセスを学生自身が行うことがルールとなっている。授業の設計課題とは異なり、予算や敷地など条件を整理し、自らが決めたテーマにそって建築空間をデザインして、材料の特徴を理解して、加工や組み立てを考え、実際に立ち現れる「建築」をつくる。設計演習課題では得られない、建築に対する興味や好奇心が生まれ、より建築デザインを身近な存在として実感することを大切にしている。実際に建築を使う利用者に対する細やかな配慮もイメージできる思考の向上へとつながる。今期も六角橋商店街の商店会の方々と連携し、商店街イベントに合わせて休憩所やステージのデザインを行った。これまで、竹・布・段ボール・紙管・角材・プラスチック段ボールといった材料を対象に、その特性を活かした空間デザインの検討を進めてきた。（表1、写真1）

表1 各年度の建築物の敷地、用途、材料

年度	敷地	用途	材料
1期 2011	旧3号館前 公開空地	神大フェスタ 休憩所	竹
2期 2012	東屋前空地	神大フェスタ 休憩所	布
3期 2013	六角橋商店街	どっきり闇市 ライブ会場	ダンボール
4期 2014	六角橋商店街	どっきり闇市 ライブ会場	紙管+ 3Dプリンター
5期 2015	六角橋商店街	どっきり闇市 ライブ会場	角材
6期 2016	六角橋商店街	食べくら横丁 ライブ会場	プラスチックダ ンボール
7期 2017	海、山、原っぱ 住宅街、公園	休憩所（フォリー）	単管パイプ+ 布
8期 2018	六角橋商店街	食べくらナイト 休憩所	角材+合板
9期 2019	六角橋商店街 公園	食べくらナイト 休憩所（フォリー）	竹+麻



写真1 2018 年度活動「400mm キューブの組合せ」

### 3. 2019 年度の活動「竹と麻布による空間の仕切り」

9 年目となる 2019 年度は、これまで以上に利用者の活動に注目することを目的とした。竹と麻布を用いて一時的な居場所の空間(フォーリー)を作成し、配置や視線の通り方、空間としての閉じ方を変化させることで、それぞれの組み方や周辺状況により、変化する人の活動を観察することが活動の目的とした。製作する居場所の空間は、簡易に解体し組み立てることができるように、ビスなどは使用せず、麻紐を用いた竹垣に使用される角縛りの方法で接合し組立を行った。

竹で三角柱の骨組みを組み立て、ねじれ防止に回転方向が対になるよう、斜めに二本の竹材を接合した骨組みを基準とした。麻布を面材として一面閉じる場合、一部分だけ開ける場合など、原寸でつくりながら様々な検討を行い、それをもとに、竹を用いた照明、竹と麻紐を用いた椅子をデザインし製作した。照明や椅子は、人が滞在するためのきっかけとなり、人の活動と空間の関係を生み出す重要な役割を担うことがうかがえた。

昨年から引き続き、岸根公園と、六角橋商店会の方々のご協力のもとで「食べくらナイト」で、実際にデザインして製作した椅子やフォーリーを設置した。「食べくらナイト」では家族連れなど複数人による参加者が多く、フォーリー内部で過ごす方が多く見受けられた。内部を感じる空間になると、空間内に人の意識による重心が生まれ、自然に視線や体が向き合うようになっていた。内部に椅子や照明を設置することで、より、その傾向は強くなり、外部に設置した場合より効果が見受けられた。

今年度はフォーリーを作成し、利用者の行動を観察する中で、いくつかの発見があった。そのなかでも、小さな空間において、家具の配置や空間を設えることで、人の意識による重心をつくりだすことができた。意識の重心をつくることで、利用者はその空間をより活用した空間体験ができていた。このことは今年度の活動だけではなく、様々な空間の設計において展開できる成果である。空間利用者の行動を観察することを活動目的として、このような成果が得られたことは参加学生の熱心な取り組みによるものである。(写真 2.3)



写真 2 「食べくらナイト」でのフォーリーの設置



写真 3 岸根公園での椅子の設置

### 4. 活動の展望

大学から出て、社会の関わりの中で、授業だけでは味わえない建築の魅力や楽しさを実感してもらうことが、このサークルの設立目的となっている。昨年から継続している 3 年生のメンバーと新入生による共同作業で活動に取り組み、例年と異なった利用者の行動に焦点をあてて進めてきた。今回の活動から、自分たちの無意識な行動に、これまで以上に意識的に気づくきっかけにもなったように思われる。自分たちで考え、複数人で試行錯誤を繰り返しながら、一緒に建築空間を作り上げ、訪れた多くの人に利用してもらうという経験はとても貴重なものとなり、さらに建築への興味がふくらみ、関心が深まったと思われる。参加学生の卒業後の進路は様々であるが、つくけんの活動がこれから社会で建築に携わっていくときの助けとなり、参加したメンバーの活躍につながれば幸いである。

\*特別助教 建築学科

Assistant Professor, Dept. of Architecture

\*\*学部生 4 年生

Graduate, Dept. of Architecture